

眠い町

小川未明

青空文庫

一

この少年^{しょうねん}は、名^なを知られなかつた。私^{わたし}は仮^{かり}にケーと名^なづけ
ておきます。

ケーがこの世界^{せかい}を旅行^{りょこう}したことがありました。ある日^ひ、彼^{かれ}は
不思議^{ふしぎ}な町^{まち}にきました。この町^{まち}は「眠^{ねむ}い町^{まち}」という名^ながついてお
りました。見^みると、なんとなく活気^{かつき}がない。また音^{おと}ひとつ聞^きこえ
てこない寂然^{しん}とした町^{まち}であります。また建^{たてもの}物^{もの}といつては、い
ずれも古^{ふる}びていて、壊^{こわ}れたところも修^{しゅうぜん}繕^{ぜん}するではなく、烟^{けむり}ひと
つ上^あがっているのが見^みえません。それは工場^{こうば}などがひとつもない

からでありました。

町^{まち}はだらだらとして、平地^{へいち}の上^{うえ}に横^{よこ}たわっているばかりであります。しかるに、どうしてこの町^{まち}を「眠^{ねむ}い町^{まち}」というかといいますと、だれでもこの町^{まち}を通^{とお}つたものは、不思議^{ふしぎ}なことには、しぜんと体^{からだ}が疲^{つか}れてきて眠^{ねむ}くなるからでありました。それで日^ひに幾^{いく}人^んとなくこの町^{まち}を通^{とお}る旅^{たび}人^{ひと}が、みなこの町^{まち}にきかかると、急^{きゆう}に体^{からだ}に疲^{つか}れを覺^{おぼ}えて眠^{ねむ}くなりますので、町^{まち}はずれの木^こかげの下^{した}や、もしくは町^{まち}の中^{なか}にある石^{いし}の上^{うえ}に腰^{こし}を下^おろして、しばらく休^{やす}もうといたしまするうちに、まるで深^{ふか}い深^{ふか}い穴^{あな}の中^{なか}にでも引^ひき込^こまれるように眠^{ねむ}くなつて、つい知^しらず知^しらず眠^{ねむ}つてしまひます。ようやく目^めがさめた時^じ分^{ぶん}には、もういつしか日^ひが暮^くれかかつて

いるので、驚おどろいて起たち上あがって道みちを急いそぐのでありました。この話はなし
 がだれからだれに伝つたわるとなく広ひろがって、旅たびする人々ひとびとはこの町まち
 を通とおることをおそれました。そして、わざわざこの町まちを通とおること
 を避さけて、ほかのほうを遠とおまわりをしてゆくものもありました。
 ケーは、人々ひとびとのおそれるこの「眠ねむい町まち」が見みたかつたのです。
 人ひとの恐おそろしがる町まちへいつてみたいものだ。己おればかりはけつして眠ねむ
 くなつたとて、我慢がまんをして眠ねむりはしないと心こころに決きめて、好こう奇き心しん
 の誘さそうままに、その「眠ねむい町まち」の方ほうを指さして歩あるいてきました。

なるほどこの町まちにきてみると、それは人々ひとびとのいったように気き味みの悪い町まちでありました。音おとひとつ聞きこえるではなく、寂然しんとして昼間ひるまも夜よるのようでありました。また烟けむりひとつ上あがっているではなく、なにひとつ見るみようなものはありません。どの家いえも戸とを閉しめきつています。まるで町まち全体ぜんたいが、ちょうど死しんだもののようしずに静しずかでありました。

ケーは壊こわれかかった黄色きいろな土つちのへいについて歩あるいたり、破やぶれた戸とのすきまから中なかのようすをのぞいたりしました。けれど、家いえの中なかには人ひとが住すんでいるのか、それともだれも住すんでいないのか、わからないほど静しずかでありました。たまたまやせた犬いぬが、どこからきたものか、ひよろひよとした歩あゆみつきで町まちの中なかをうろついて

いるのを見^みました。ケーは、この犬^{いぬ}はきつと旅^{たび}人^{びと}が連^つれてきた犬^{いぬ}であろう、それがこの町^{まち}の中^{なか}で主人^{しゅじん}を見^み失^{うしな}つて、こうしてうろついているのであらうと思^{おも}いました。ケーはこうして、このま^まち^{なか}の中^{なか}を探^{たん}検^{けん}していますうちに、いつともなしに体^{からだ}が疲^{つか}れてきました。

「ははあ、なんだか疲^{つか}れて、眠^{ねむ}くなつてきたぞ。ここで眠^{ねむ}つちやならない。我慢^{がまん}をしていなくちやならない。」
と、ケーは独^{ひと}り言^{こと}をして、自^じ分^{ぶん}で気^きを励^{はげ}しました。

けれど、それは、ちようど麻^{ます}酔^い薬^{やく}をか^かがされたときのよう^{よう}に、体^{からだ}がだん^だん^だしびれてきました。そして、もうすこしでもこうしていることができなくなつたほど、眠^{ねむ}くなつてきましたので、ケ

「はついに我慢がしきれなくなつて、そのへいの辺に倒れたまま、前後も忘れて高いいびきをかいて寝入つてしまいました。」

三

よく眠つたと思いますと、だれか自分を揺り起こしているようでありましたから、ケーは驚いて目をみはつて起き上がりますと、いつのまにやら日はまったく暮れていて、四辺には青い月の光が冷ややかに彩っていました。

「もう何時ごろだろう、これはしまったことをしてしまった。いくら眠くても、我慢をして眠るのではなかったが。」

と、ケーは大いおおに後悔こうかいしました。けれども、もはやしかたがありません。

彼は、そこおに落ちていた自分じぶんの帽子ぼうしを拾ひろい上げて、それをかぶりしました。

そして四辺あたりを見まわしますと、すぐ自分じぶんのそばに一人ひとりのじいさんが、大きな袋おおふくろをかついで立たっていました。

ケーは、このじいさんを見ると、だれか自分じぶんを揺り起おこしたように思おもったが、このじいさんであつたかと思かんがえましたから、彼は臆おくする色いろなく、そのじいさんの方ほうに歩あるいて近づちかきました。月の光つきひかりで、よくそのじいさんの姿すがたを見守みまもると、破やぶれた洋服ようふくを着きて、古ふるくなったぼろぐつをはいていました。もうだいぶの年としとみえて、

白いひげが伸びていました。

「あなたはだれですか。」

と、少年は声に力を入れて問いました。

するとじいさんは、とぼとぼとした歩きつきをして、ケーの方
に寄つてきて、

「私だ、おまえを起こしたのは！ 私はおまえに頼みがある。じ

つは私がこの眠い町を建てたのだ。私はこの町の主である。けれ

ど、おまえも見るように、私はもうだいぶ年を取っている。それ

で、おまえに頼みがあるのだが、ひとつ私の頼みを聞いてくれぬ

か。」

と、そのじいさんは、この少年に話しかけました。

ケーは、こういつてじいさんから頼たのまれれば、男子だんしとして聞きいてやらぬわけにはゆきません。

「僕ぼくの力ちからでできることなら、なんでもしてあげよう。」

ケーは、このじいさんに誓ちかいました。じいさんは、この少しょうね

年ねんの言葉ことばを聞きいて、ひじょうに喜よろこびました。

「やつと私わしは安心あんしんした。そんならおまえに話はなすでしょう。私わしは、

この世界せかいに昔むかしから住すんでいた人間にんげんである。けれど、どこからか

新あたしい人間にんげんがやってきて、私わしの領土りやうどをみんな奪うばつてしまった。

そして私わしの持もつていた土地とちの上うえに鉄道てつどうを敷しいたり汽船きせんを走はしらせ

たり、電信でんしんをかけたりしている。こうしてゆくと、いつかこの

地球ちきゅうの上うえは、一本ぽんの木きも一つの花はなも見みられなくなってしまうだ

ろう。私は昔わしむかしから美しいこの山うつくやまや、森林しんりんや、花はなの咲く野原のほらを愛あいする。いまの人間にんげんはすこしの休息やすみもなく、疲れつかということも感かんじなかつたら、またたくまにこの地球ちきゅうの上うへは砂漠さばくとなつてしま
うのだ。私は疲労わしひろうの砂漠さばくから、袋ふくろにその疲労ひろうの砂すなを持もつてきた。
私は背わしせなか中にその袋ふくろをしょつてゐる。この砂すなをすこしばかり、どん
なものの上うへにでも振りかけたなら、そのものは、すぐくさに腐れ、さ
び、もしくは疲つかれてしまふ。で、おまえにこの袋ふくろの中の砂すなを分け
てやるから、これからこの世界せかいを歩あるくところは、どこにでもすこ
しずつ、この砂すなをまいていつてくれい。」
と、じいさんは、ケーに頼たのんだのでありました。

四

少年しょうねんは、じいさんから、不思議ふしぎな頼たのみを受けて、袋ふくろを持つて、この地球ちきゅうの上を歩あるきました。ある日ひ、彼はアルプス山の中を歩あるいていますと、いうにいわれぬいい景色けしきのところがありました。そこには幾百人いくにんの土方どかたや工夫こうふが入はいっていて、昔むかしからの大木たいぼくをきり倒たおし、みごとな石いしをダイナマイトで打ち砕くだいて、その後あとから鉄道てつどうを敷しいておりました。そこで少年しょうねんは、袋ふくろの中から砂すなを取り出だして、せっかく敷しいたレールの上うえに振りかけました。すると、見るまに白しろく光ひかっていた鋼鉄こうてつのレールは真まっ赤かにさびたように見みえたのでありました……。

またある繁華はんかな雑沓ざつとうをきわめた都会とかいをケーが歩いていました
 ときに、むこうから走はしつてきた自動車じどうしゃが、危あやうく殺ころすばかりに
 ひとりひとりのでつち小僧こぞうをはねとばして、ふりむきもせずゆきすぎよう
 としましたから、彼かれは袋ふくろの砂すなをつかむが早はやいか、車輪しゃりんに投げか
 けました。すると見るまに車くるまの運転うんでんは止とまつてしまいました。
 で、群集ぐんしゅうは、この無礼ぶれいな自動車じどうしゃを難なんなく押おさえることがで
 きました。

またあるとき、ケーは土木工事どぶくこうじをしているそばを通とおりかかりま
 すと、多くおおの人足にんそくが疲つかれて汗あせを流ながしていました。それを見みると
 気きの毒どくになりましたから、彼かれは、ごくすこしばかりの砂すなを監督かんとく
 人にんの体からだにまきかけました。と、監督かんとくは、たちまちの間あいだに眠気ねむけ

をもよおし、

「さあ、みんなも、ちつと休やすむだ。」

といつて、彼かれは、そこにある帽子ぼうしを頭あたまに当てて日の光ひかりをさえぎりながら、ぐうぐうと寝ねこんでしまいました。

ケーは、汽車きしやに乗のつたり、汽船きせんに乗のつたり、また鉄工場てつこうじやうにいったりして、この砂すなをいたるところでまきましたから、とうとう砂すなはなくなつてしまいました。

「この砂すながなくなつたら、ふたたびこの眠い町ねむまちに帰かえつてこい。すると、この国くにの皇子おうじにしてやる。」

と、じいさんのいふ言ことばを思おもひ出だし、少年しょうねんは、じいさんにあおうと思おもつて、「眠い町ねむまち」に旅出たびでをしました。

幾いくにち日ひかのちの後「眠ねむい町まち」にきました。けれども、いつのまにか
 昔むかひ見たみたような灰はい色いろの建たて物ものは跡あと形かたもありませんでした。のみ
 ならず、そこには大おおきな建たて物ものが並ならんで、烟けむりが空そらにみなぎつてい
 るばかりでなく、鉄てつ工こう場じょうから響ひびきが起おこつてきて、電でん線せん
 はくもの巢すのように張はられ、電でん車しゃは市し中ちゆうを縦じゆう横おうに走はしつて
 いました。

この有あり様さまを見ると、あまりの驚おどろきに、少しょう年ねんは声こえをたてる
 こともできず、驚おどろきの眼まなこをみはつて、いっしょうけんめいにその
 光こう景けいを見み守まもっていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 Ⅰ」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「日本少年」

1914（大正3）年5月

※表題は底本では、「眠《ねむ》い町《まち》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

眠い町

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>